

優秀賞

— 高校生の部 —

「未来へ伝える小さな国」

山下実穂さん

推し本：『コロボックル物語
だれも知らない小さな国』
著：佐藤さとる
推したい相手：未来の自分の子ども



「未来へ伝える小さな国」 山下実穂

五日前、私はこの文章を書くにあたって「だれも知らない小さな国」を数年ぶりに開いた。四十年以上の年季が入った黄ばんだページは、めくるとパリパリと音を立て、祖父母の家の木の香りがする。こうして、幼少期の思い出が一気に蘇ってきたのだ。寝食を忘れて物語に没頭していた日々を思うと胸がじんわりと暖くなり、私は改めてこの作品の偉大さを知るとともに、この体験は独り占めするにはもったいないと感じた。だから私は、未来の自分の子どもに「だれも知らない小さな国」を推したい。佐藤さとる著の「だれも知らない小さな国」は、昭和五十五年に初版が講談社から発行されたファンタジー小説であり、「コロボックル物語」シリーズの第一作目となる。ある小山に密かに国を築いた「コロボックル」たち小人一族と主人公「ぼく」が邂逅して友情を育み、そして「ぼく」が道路の敷設で潰されてしまいそうな小山を守るために奮闘する様子が綴られている。このシリーズは、心を揺さぶられる筋書きはもちろん、綿密に構築された世界観やディテールへのこだわり、そして全てを包み込むあたたかい文体が特徴だ。例に漏れず、私も佐藤さとるが描く世界にすっかり魅了されていた。私がコロボックルに出会ったのは十年前、小学二年生の夏。ある日、幼い頃に「だれも知らない小さな国」を愛読していたらしい母が、長年我が家に眠っていた初版を私の本棚に忍ばせてくれたのだ。見慣れない青い鳥文庫の装丁と精緻なタッチの挿絵に、胸が躍ったことを覚えている。あっという間に、私はコロボックルのとりことなった。当時の私は父の転勤によりイギリスに住んでいたのだが、自然豊かな日本の暮らしとそこに潜む小人たちをうっとりと思像した。自分も「ぼく」のようにコロボックルの「味方」となり彼らの秘密を知りたいと、必死になって庭の片隅やクローゼットの中を覗き込んだ。異国での孤独な生活も、小人たちの息遣いを感じることでドキドキするものとなった。コロボックルは、幼き日の私を支えてくれていたのだ。そして、コロボックルはきっと、未来の私の子どもも支えてくれる。「だれも知らない小さな国」の「ぼく」は作中で成長して「せいたかさん」と呼ばれるようになり、以後の作品では自身の子どもとコロ

ボックルの交流を見守るようになるが、私は彼のポジションに就きたいのだ。それは、私の母のようなポジションでもある。私を「コロボックル物語」に出会わせてくれた母は、私が小人たちを探しても決して否定することなく、私の冒険を応援してくれた。母と一緒に段ボール箱からコロボックルの家を作ったり、彼らの絵を描いたりしたことは、今でも大切な思い出だ。いつか、私も我が子に同じような思い出を授けられたら、これほど幸せなことはないだろう。ただ、押し方には注意しないといけない。母が私の部屋に本を忍ばせてくれたことで、私は「ぼく」が自力でコロボックルの小山に辿り着いたように、小人たちを発見する喜びを味わうことができた。よって、私の子どもにはさりげなく本を勧めたいと思う。母のようにこっそり本を置いておこうか、なんでもない顔をしてプレゼントしてみようか。想像するだけでわくわくする。「だれも知らない小さな国」は、私の子どもの幼少期を彩るだけでなく、成長してからも宝物となってくれるだろう。「コロボックル物語」シリーズは児童文学でありながら、戦後の荒廃した日本や、開発のために犠牲にされる環境など、大人の世界にも通用するテーマを扱っている。そして、登場する小人たちはそれぞれの苦勞を抱えながらも、社会をたくましく生き抜いている。子ども時代にシリーズに触れた上で大人になり読み返すことで、また新たな感想を抱けるに違いない。私も、更に年を重ねてから読み返すことが楽しみだ。また、コロボックルと過ごした思い出は、私の子どもが成長しても色褪せず心の拠り所となってくれるだろう。現代の子どもたちはスマホやビデオゲームをはじめとする、迅速に供給・消費されるエンタメで飽和している 21 世紀を生きている。それも幼少期の一つの形ではあると思うが、私は自分の子どもには「だれも知らない小さな国」から得られるような、自然の息吹をありありと感じる、穏やかな幼少期を少しでも体験してほしい。年月を経るほど味わいが増す作品だってあると思うのだ。シリーズ最終巻「小さな国のつづきの話」にて、一族の長老であるモチノヒコはコロボックルの物語をこう表現する。「読んだ人の心には、かわいた畑にまいた水のように、この『小さな歴史物語』がしみこんでいくにちがいない」と。私の子どもの心が、幼い時も大人になってからも潤ってくれるように、私は「だれも知らない小さな国」を推そう。きっとやがて、そこから優しさが芽生える。